

“ことば”に隠された政治性

- ①はじめに
- ② “ことば”を特定するには
- ③ ヨーロッパ政治史と“ことば”の変容
- ④ “ことば”の思想
- ⑤ 政治性を越えて
- ⑥ おわりに

① はじめに

近代国民国家の構成要素＝国民

- ・歴史的に形成された存在である

市民革命、国家統一、近代化政策、憲法制定・・・

- ・個々人の意識が生み出す「想像の共同体」(B・アンダーソン)

国民文化・国民言語(本勉強会での“ことば”)・民族意識・国民神話といった近代的価値観の共有を根拠とする一体感による不可分で排他的な政治的共同体の形成

国民国家の問題点

- ・「国民」の排他性に起因する差別主義

→人種、民族差別 紛争

- ・人々の意識や社会の画一化、純粹主義

→個人や、社会共同体の複合的なあり方を否定

⇒近代に生きる我々の思考は「(自)文化」、「(自)言語」、「(自)民族」といった近代的価値観によって規定されており、それらに対する帰属を表明することで知らず知らずのうちに「国民国家」システムを再生産している。つまり、近代的価値観に基づき思考し、発言し、行動することは、即政治的行為であるといえる。

本勉強会では、特に言語(“ことば”)の持つ政治性について考えてみたい。

② “ことば”を特定するには…

- ・日本語、英語、中国語など… これらの“ことば”は

I：数えることができる

II：国や民族の名で呼ばれる

2009年6月9日(火)

同志社大学政治学研究会一回生企画

文責・発表

法学部政治学科2009年度生 関根隆晃

I →つまり、**排他的な体系的統一**として想定されている

体系=文法

文法は“ことば”に内在?

→否、むしろ**外部**にある

日常の自然な言語生活

- ・“ことば”は変化する。
- ・言語の雑種性(外来語の混在)
- ・多様性(若者言葉・方言)

「**文法**」に規定された“ことば” →文字をもつ“ことば”

- ・空間、時間を超えた恒常性を保とうとする =変化を誤りとみなす
- ・禁止の体系 =表現の可能性を限定する
- ・権威的性格 =「方言」を従属させる
- ・純粋で均質 =排他主義

文法は「**規範**」としてことばの外部に「**造られた**」**理念**(イデオロギー)である。従って、“ことば”もまた**理念**である。

→死産される日本語(酒井直樹)

II →民族・国民共同体によって言語共同体の範囲が想定されている

しかし…ある集団を「民族」や「国民」と見なすどうかは**政治的判断**に任される

→方言か言語か?

Ex. ドイツ語とルクセンブルク語

スペイン語とポルトガル語

日本語と琉球語

③ヨーロッパ政治史と“ことば”の変容

ローマ帝国期・中世

歴史的に“書き言葉”は政治、文化の言葉=エリートの特権

Ex. ラテン語、漢文

- ・書くためには**文法**が必要…「正しい」姿を「学ぶ」

→帝国、教会の規範としての“ことば”

- ・民衆は「**俗語**」を話す

ルネサンス期

俗語による文学作品(Ex. ダンテ『神曲』) ⇒文字の獲得、「**母語の思想**」が登場

大航海時代・絶対王政期

2009年6月9日(火)

同志社大学政治学研究会一回生企画

文責・発表

法学部政治学科2009年度生 関根隆晃

王権伸長、領土拡大とともに各国は自国の俗語に文法をあてがう←植民地支配のため

・1492年 カステリア語 「言語は常に帝国の伴侶」(ネブリーハ)

・1536年 ポルトガル語

・1586年 英語

⇒**文法の獲得、「権威」の確立**

フランスでは、ヴィレール・コトレの勅令(1539)で北部フランス語が**国家語**となる。

⇒**法的地位の確立**、プロヴァンス語・ラテン語の追放

さらに、1635年には「アカデミー・フランセーズ」が発足→アカデミー方式はじまる

⇒**検閲による「正しい」フランス語の確立と普及**

フランス革命期

1793年 フランス国民公会(第一共和政)は「共和国の**すべての**子どもはフランス語を話し、読み、書かねばならない」と**決定**。

・「われわれは言語を革命しよう」(バレール 1934)

→「言語の平等」=少数言語の排斥、国民としての一体感の増進

⇒「**国民国家語=国語**」へ

・現在あるような「文法」と「文字」を備えた“ことば”は国家の**政治的要請**のなかで形成されていき、その一部は国民語となっていた

・こうしてフランスで生まれた国語思想はその後国民国家主義の波及とともに各国へ広まってゆく

→日本へ(明治27年 上田万年)

④ “ことば”の思想

国民語の言語共同体を“**標準**”とみなす(統制の実定性)

・少数言語・方言→「**異物**」、**排除**・**矯正**の対象

“ことば”とその言語共同体の「**純化**」・意識の均質化

・「**自他の別**」の意識を強める→**排他主義**

「文化」共同体・「民族」共同体など、言語共同体以外の集団と言語共同体が**同一視**される

・排他的な「民族」や「国民」を創出→民族=文化=国民の図式からはみ出る者を「**異常**」とみなし排除

⑤ 政治性を越えて

“ことば”の背後に潜む上記のような「思想」の自覚

2009年6月9日(火)
同志社大学政治学研究会一回生企画

文責・発表
法学部政治学科2009年度生 関根隆晃

虚構の純粹性、排他主義の相對化

→ピジン、クレオール

・“純粹イデオロギー”の否定

多様性の回復

→複綜言語主義 ×多言語主義

⑥ おわりに

参考文献

姜尚中 2006 『愛国の作法』朝日新書

酒井直樹 1996 『死産される日本語・日本人』新曜社

田中克彦 1981 『ことばと国家』岩波新書